犬

水野仙子

或日曜の午後、三好夫婦はもと住んで居た郊外の方へ散歩に出掛けた。

もう秋も末のことで、僅かに殘つた櫨の紅葉が、崖の後の叢に赤くなつて居る位のものであつた。さういふ野の道を歩き廻つた末、わざと廻り道をしてもとの家の前を通るやうにした、出入りであつた八百屋の前を通ると、お内儀さんが帳面を持つて店に立つて居たが、ふと振向いて怪訝さうに見て居たつけ、やがて思ひ出したやうに愛想笑ひをしてお辭儀をした。

「よく覺えてるね！」と三好は言つた。

もとの家の門には「山村」といふ木の表札が出て居た。細君が要の生垣から縁の方をのぞいてみると、障子がぴたりとしまつてゐて、家の中には人の氣はひもしないやうであつた。赤んぼがあるとみえて、裏の梅の木にかけ渡した竿に、おしめが澤山干してある。

「なんだか私達が住んでた時よりも汚くなつてますね、障子なんか隨分やぶけてましたよ。」と細君は少し蔑むやうに言つた。それでも何かとあたりが懷しいやうな風で、頻りにそこらを眺め廻して居たが、ふと隣りの家の表札に目をとめて、行き過ぎた夫のあとを追ひながら、

「林さん、ぢやどつかに越して了ひましたね。」

と言つた。

「うん、さうらしいね。」

「あのベスはどうしたでせう？」

「さあ、矢張りついてつたらうさ。」

夫婦はそれからぶら／＼と歸途についた。落葉が日蔭の乾き切れないぬかるみに溜つて、しと／＼と濕つて居る。その上に車の轍の跡が深くついて居た。

「あら！貴君、あれはベスぢやないでせうか？」と突然細君は言つた。夫婦の歸つて行く道の方から、小走りに歩いて來る大きな犬がある。

「さうぢやないだらう、少し大き過ぎるよ。」

「だつて・・・さうですよ必と、さうらしいわ！」

犬はだん／＼近づいて來た。

「うん、ベスだ！」と目を凝らして見て居た三好は言つた。

「ベス！ベス！」と呼ぶと、長い舌を出して耳を搖りながら歩いて來た犬は、何處の誰がといふやうな顏をして、濟してそこを通り過ぎようとした。

「ベス！ベス！」と細君も呼んだ。

と、犬はぬうつとその大きな顏を二人の間に持つて來て、袖の下あたりに鼻を動かすと、急に飛びたつやうに異しげな聲を出して、躍り廻つた。

「おゝ／＼、覺えてたか／＼、うゝんベス！大きくなつたなあ！」と、跼んでその頭を撫でゝやると、犬は切れるやうに尾を振りながら、三好の顏といはず手といはずにぺろ／＼舐めかけた。

「まあ、ほんとに大きくなつたのね、まるで小牛のやうだわ！」

犬はまた細君にも飛びついてその着物に泥をつけた。夫婦は暫く滯つて犬に構つて居たが、

「林さんもやつぱりこのへんにいらつしやるものとみえますね。」とそろ／＼歩き出した。

犬は久振りで逢つた馴染のあとを追ふやうに、二人をおひ越して眞先に歩き出した。

「でも能く覺えてること、匂ひでゞもわかるんでせうか。」

「さあ、だが関心なもんだねえ。」

夫婦は何か思はぬ土産物でも得たやうな心持をしながら歩いた。家を持つてから二年にもなるのに、まだ子供がないので、二人ともよく犬だの猫だのを可愛がつた。そして越し

て行く先々で、近所の飼犬を手なづけて喜んで居た。けれど決して自分の家に飼つたことがなかつた。

「餘外の犬を可愛いがるのが、一番責任がなくていゝねえ。」

と三好はよく笑つて言つて居た。

犬は夫婦の先に立つて勢よく歩いた。さうして道の曲り角に行くと、振向いて二人の顔を見ながら其處に待つて居た。

「ベス！」と言葉をかけると、嬉しさうに寄つて來て體をこすりつけて、また走るやうに二人の先に進んだ。若し自分が勝手に道を曲つて、夫婦が別な方に通り過ぎたのを知ると、非常な勢ひであとから追ひかけて來た。さうして少し遠くなつて來てからは、あつちの道ばたにおしつこをし、こつちの石ころにおしつこをしかけて行つた。

「どこまで蹤いて行く積りでせう？家までいつてしまふかも知れないわ。」

「なんか喰べさせてやらうぢやないか、連れて行つて。」

それからは少し犬の姿が見えなくなると、三好は立止つて口笛を吹いた。すると人の家の垣根をくゞつて出て來たり、とんでもない方の道から飛んで來たりした。

いつの間にかあたりは暮れかけて居た。ほど遠い豆腐屋のラツパの音が、茜色の空に妙に侘びしく響いてゐる。少し家並の込んだあたりに來ると、方々の屋敷から仲間の姿を見つけた犬が時々烈しく吠えたてる。そんな時にはベスは尻尾を垂れてしまつて、嗅ぎ廻る牡犬の中に困つたやうな顔をして居た、ベスは雌犬であつた。夫婦は荒くれた犬どもをステツキで逐ひ拂つてベスをかばつた。

夫婦が今の住居に近い自働電話の角まで來ると、犬はどうしても其處から動かなかつた。呼べば尻尾を振るだけで、何か不安さうな顔をして二人を見送つて居る。引張つても如何しても動かない。しまひには其處に寢そべつてしまつた。

「どうしたんでせう？くたびれたんでせうか？」

「おいベスベス！もう直ぐそこなんだよ、おいで！」
細君はふと思ひ出して、そのへんにあつた駄菓子屋から安パンを少し買つた。すると犬はたわいもなく蹤いて來た。
「こいつ、現金な奴！」
夫婦は家に歸つた。そして締めて出た雨戸を開けて電氣をひねると、丁度珍しいお客様でも迎へたやうに、縁側に犬を廻らせて殘りものなぞを喰べさせた。間もなく夕飯になると、細君は洗面器に御飯を盛つて、肉の汁をかけてやつた。
その夜夫婦は、樂しく過した今日一日を語りあひながら、輕い疲れにいつもより早く床に就いた。
翌朝、三好はふと雨戸を尻尾で叩くやうな犬の音と聲とを聞いたやうな氣がした。
「おい、ベスが來てるよ！早く起きてごらん！」と三好は細君を呼び起した。
「へえ！ぢやゆうべ歸らなかつたんでせうか、私が雨戸をしめる時には居ないやうでしたがねえ。」と細君はいつになく床離れよく起き出した。
雨戸を開けると、待ち兼ねたやうに犬は細君の胸を目がけて飛びついた。
「おゝ／＼、お前ゆふべとまつたのかい？」
三好もあとからどてらに兵古帶を卷きつけながら出て來た。犬は縁の下に寢たものと見えて、毛がそこらに落ち散つて居た。
「お前家で心配してるよ、早くお歸り！そしてまたあとでおいで！」
三好が玄關で靴をはいてると、勝手元の方でそんなことを言つてる細君の聲が聞えた。いつもの道を電車へと急ぐ途中、いつの間にか犬があとをついて來てるのに氣づいた。犬は停車場の高い階段の上までもついてのぼつた。さうして三好の乘つた電車が動き出した時、その事を何か會得しようとする

やうな顔で暫く見送つて居た。

その日三好が例の時刻にひけて來た時、眞つ先に飛び出して來たのは犬であつた。

「おい／＼、ベスがまだ居るぢやないか！」

「えゝ、どうしても歸らないんですよ。私さつきなんにも知らないでおひるを喰べてましたらね、硝子の外からヒユウヒユウと言つてねだつてるんですよ。私ほんとに吃驚したわ、お縁側の沓脱の上にちやあんと乘つかつてのぞいているんですもの。」

「こら、ベスの馬鹿！家を忘れたのか貴様あ、歸らなけりやいけないぢやないか！」

三好がわざと叱るやうにいふと、犬は前足を踏んでは頻りに尾を振つて居た。

「どうしたんでせうねえほんとに、家を忘れる筈がないんだけれど・・・貴君林さん、ぢやどこにいらつしやるんでせう？」

「さあどこだかねえ。こいつ首輪がないぢやないか？」

「さうですか、さういへばさうですねえ、ぢや野良犬になつてたんでせうか？・・・」

「それにしちやあ毛なみがよすぎるよ。」

夫婦は暫く默り合つてお互に何かを考へて居た。犬はその日もとう／＼歸らなかつた。さうしてその翌朝も、尻尾で雨戸を叩いて二人を起した。

「あなた、いつそ家で飼ひませうか――？」

と細君は夫の顔色を窺ふやうに言つた。

「お止し、なか／＼大變だよ、我々二人分位ぺろりと喰べてしまうからねえ。それに飼ふならもつと小さいのを飼つた方がいゝよ。」

二人はそんなことを言ひ合ひながら縁側に立つて、瞬く間に平げて行く犬の喰ひぶりを嬉しさうに見て居た。その餌入れにしてやる洗面器が、時には夕方までも沓脱の上に白く置

かれてあることがあつた。

犬は細君が買物に行くのにも、風呂に行くのにも必とついて行つた。風呂では歸る時迄湯屋の表のたゝきの上に丸くなつて寢て居た。

「困るぢやないか、いつまでもかうして歸らないでゐられちやあ——なんにもやならなつたら歸るかも知れないよ、これからなんにもやらないやうにしてごらん！」

「えゝ、殘つた時でなけりあやらないやうにしてるのよ。」

「殘つてもやらないやうにしなきあいけないよ。ひもじくなつたら必と歸つて行くに違いないから・・・・」

それから二日ばかりの間、犬は勝手元に物音がしさへすると、走つて行つて物欲しさうに鼻をならした。細君はその聲を聞くのが辛いので、いつもぴしやりと荒々しく戸を閉めた。犬はまた縁側の方に廻つて、障子のガラスから二人の食事を眺めて居た。

半日ほど姿を見せない時があつたので、好い按排にと細君は心密かに思つて針を動かして居た。とその夜雨戸を閉め切つてから、ぱたり／／と塵埃箱の蓋を取る犬らしい氣はひがして、やがて大きな物音と共にそれがひつくりかへつたやうであつた。あたりは此上もなくひつそりとして居た。

或日のこと、細君は今し方乾物屋の置いて行つた鰹節をしまはうと思つて、手離しのいゝところで針をとめて立つて行くと、たしかにことりと音のして置いて行つた筈のがそこに見當らない。ふと氣付いて細君は下駄をひつかけて表に出て見た。と前の空地の枯草の上に寢そべつて、犬は頻りに前足でぼり／／と嬉しさうに何かを喰べて居た。

「ベスの馬鹿！ベスの馬鹿！」

細君は驅け寄つていきなり犬の頭を打つた。そして驚いて飛び出した犬のあとに、噛ぢり殘した鰹節の小さな片を拾ひ上げながら、遠くに行つてこつちを見てゐる犬の顏を暫く睨

めつけて居た。

底本：「新公論」一月號　大正三（1914）年
入力：小林　徹
公開：令和三年四月十七日
リンク：水野仙子ホームページ